

投稿**世界が福岡にやってきた！****～速報！世界天文コミュニケーション会議 2018～**

矢治健太郎（杉並区立済美教育センター、国立天文台）

1. まさかの400人超え

2018年3月24日から28日、「世界天文コミュニケーション会議 2018 in 福岡」（以下、CAP2018、もしくは、CAP）がついに開催された。CAPは、天文学コミュニケーションに関する取り組みについて、様々な意見や経験を交換する場として、国際天文学連合（IAU）により、設立された国際会議である。場所は、昨年10月にオープンしたばかりの福岡市科学館。思えば、2016年にコロンビアのメデジンでCAPが開催されたあと、「次回はぜひ日本で開催を！」ということで、関係者で誘致のために相談を繰り返し、応募書類を作成・提出。そして、いくつもの有力地が立候補する中、2016年11月にその開催を勝ち取った。筆者はこれまで、天文教育の誌面上でCAPについて、何度もその面白さと意義を紹介してきた。そして、今回、日本での開催に決まり、積極的な参加を機会あるごとに訴えてきた。すると、参加登録者が

「え？ 400人？」

いや、正直200人越えるかなあ、国内から50人くらい参加してくれるかなあ、という気持ちだった。過去のCAPの日本からの参加者数はせいぜい10人。ところが、予想に反してなんと400人オーバー。うれしいことに約200人は日本人。とはいえ、これに慌てたのは我々開催側。メイン会場のサイエンスホールではとても入り切らない。慌てて、館内にサテライト会場を準備して中継を手配し、参加申し込みも締切を前倒し。1月末で打ち切った。参加を考えていて、申し込めなかつた人には大変申し訳なかった。なお、CAP2018の参加者・発表数を表1に示す。

わたしは、過去4回、CAPに参加してきたので、今回で5回目の参加。特に今回はLOC（国内事務局）としての参加で、事前準備や当日の運営に関わった。したがって、当日は裏方仕事もあり、CAPの全てを見ていたわけではないが、今回は速報ということで、LOCの矢治視点で、このCAP2018を報告する。なお、速報ということもあり、内容はかなりざっくり書いてるので、講演者の氏名・所属などの情報を一部省略していることをご容赦いただきたい。

表1 CAP2018の参加者・発表数

参加者	446人
参加国・地域	53か国
招待講演者	5人
全体講演	24件
分科会講演	141件
ポスター講演	111件
ワークショップ	24件

2. CAP2018、怒涛と興奮と感動の5日間**2.1 開幕前夜**

まずはCAP前日の3月23日（金）。初日の受付混雑を回避するために、この日の午後3時から受付を開始した。どれくらい来るかと思ったら、受付開始から続々と参加者が現れる。登録番号を確認して、プログラムや観光案内が入ったカンファレンスセットやネームホルダーを手渡す（図1）。中には過去のCAPで会ったことがある人も現れ、久々の再会に、思わず、相手に飛びついて、握手やハグの連続。なお、プレイベントとして、メイ

ン会場のサイエンスホールで、いくつかの映像を流した。夜9時の最後の最後まで参加者が現れ、結局、参加登録者の半分以上が前日のうちに受付を済ませてくれた。



図1 カンファレンスセット

2.2 前半戦（初日から3日目）

初日（24日）：いよいよ、CAP2018の開幕。まず、開会式。CAPの実行委員長の一人、オアナ・サンドゥを始めとして、福岡市科学館の伊東久徳館長、国立天文台の林正彦台長、日本天文学会の柴田一成会長など6人が次々に登壇して、歓迎の挨拶。そして、招待講演として、海部宣男氏（国立天文台名誉教授）が、日本の天文教育普及の歴史や現状を紹介した（図2）。

ところがこの日は、なんと福岡空港でトラブル発生。飛行機がパンクとかで空港内で立ち往生。いっとき空港が閉鎖。おかげで、一部の便が他の空港で（松山とか北九州とか長崎とか）降ろされたり、到着が遅れたり。そのため、全体セッションの講演者の一人が時間に間に合わず、講演者を交代するハプニング発生。到着が遅れたために、聞きたい講演が聞けなかつたという参加者もいた。

さてさて、メイン会場は、気がつけばほぼ満席状態。サテライト会場の様子を見に行くと、こちらも盛況だった。もっとも日本語同時通訳の部屋はちょっと空いていたが。

初日は「IAU100周年特別セッション」と

いうセッションも行われた。2019年に国際天文学連合（IAU）は設立100周年を迎える。そこで、この機会に「IAUとして何ができるか？」と、8人が登壇し、「暗い夜空」「天文教育」「観望会」など各々のテーマで展望を語り、パネルディスカッションが行われた。

夜には、大濠公園で、ウェルカムイベントが催され、CAPは初日から大変だいに盛り上がった。



図2 海部宣男氏の招待講演の様子

2日目（25日）：午前の全体セッションで、招待講演が2件。一人目は南アフリカからやって来た、ワンダ・ディアズ・メルセドさん。彼女は来る途中、ケープタウンで飛行機に乗り遅れるというトラブルがあり、周囲はやきもきしていたが、幸い23日朝に無事到着。「トラブルも楽しいものよ」と、元気よく講演されていた。ちなみに講演テーマは「障がい者とマイノリティとともに楽しむ天文学」。もう一人の講演者は、東大IPMUの物理学者・村山斎さん。「みんなの宇宙のダークサイド」というタイトルで軽妙かつテンポよい語り口で、ときおり会場から笑いをさそっていた。村山さんは、夜にも市民講演会で講演された。

午後は4会場に分かれての分科会セッション。わたしがいた会場は、日本人の発表者が多く、JAXAやひので衛星、野辺山でのアクトリーチ活動やメディア対応の話を聞くことができた。また、東南アジア系の発表者も多

く、各国の天文教育普及事情を知るいい機会となった。中には宗教の違いからくる衝突など生々しい話題もあった。アート系の発表が集まった会場もあり、そこも独特の盛り上がりがあったと聞いた。また、英語での発表が難しい、ということで、Google の読み上げ機能を使って、自動音声で発表したツワモノも。ところが、これはこれで、twitter などでとても評判になっていた。

3日目（26日）：午前は全体セッション。基調講演は、ドミニク・プロサードさんで、ニューメディアにおける科学コミュニケーションの話題。スウェーデンから来たというダロリオさん。天文とマンガについて発表した。その例の一つとして出たのが、なんと「グレンダイザー」（図3）。その後、「銀河鉄道999」や「北斗の拳」と続くのだが、なんでグレンダイザー？ このダロリオさん、本来は宇宙磁場の研究者らしい。



図3 ダロリオさんの発表

スライドにはなぜか日本のSFアニメの「グレンダイザー」

午後は5会場にわかつての分科会セッション。1つがはプラネタリウムを会場にしたドームセッション。ただ、他に聞きたい発表があったので、あまり見られず。

ポスター会場も大盛況（図4）。ただ、発表数が多くなこともあり、ポスターの掲示期

間を日程の前半と後半に分けた。それでも、ポスターセッションの時間は毎回盛況で、参加者はコーヒーを片手に議論を繰り広げた。この日は、自分の口頭発表もあり、もう疲労困憊。でも、「Touch the Sun with Hinode together!」というタイトルで、8年間行ってきた、ひでの衛星と中高生との同時観測キャンペーンについて発表した。



図4 ポスター会場の一場面

2.3 後半戦（4日目と5日目）

4日目（27日）：ワークショップが多数開催されるのも CAP の特徴。ところが、今回、多くの申し込みがあり、20件のワークショップが認められ、アンコールを含めると24件のワークショップが行われた。そして、これらが27日丸1日かけて、全て行われた。ワークショップの所要時間は、一つ90分。ワークショップの内容も様々。メディア系、インクルーシブ系、サブカル系、実習系、プロジェクト系などなど。例えば、天文ソフトの Mitaka の VR 体験。サブカル系？では、マンガを使った天文コミュニケーションなど。わたしは、TMT 国際チームによる、大規模な国際サイエンスプロジェクトで教育・人材育成・広報普及活動をどうすれば有効に行えるかというテーマのワークショップに参加した[2]。

プレゼンテーションをテーマにしたワークショップでは、トークのテーマをくじ引きで

選んで、1分でトークをするというのも。「ささやき」「きのこ」「シャンパン」という微妙なテーマを参加者がひく中、わたしは天文関係の「月」をひき当てた。それでも、一瞬何を話そうかと迷ったあげく、かぐや姫の話を1分で（もちろん英語）行った。でも、他の参加者のトークもなかなか見事だった。

ワークショップは、各々、最高4件までは参加できる。が、さすがのわたしも4つ目になるとさすがにくたくた。参加者も申込み人数からかなり減っていたが、各会場とも盛り上がった模様。

今回、アフリカからの参加者も多く、見かけるたびに「昔、ザンビアとか南アフリカに行ったことがあって」などと声をかけて、わたし流の国際交流を楽しんだ。

最終日（28日）：5日にわたったCAPもついに最終日。もう終わってしまうのかと思うととても名残惜しい。

招待講演は、サイエンスライターのジェニファー・アウレッテさん。全体セッションでは、「系外惑星発見にまつわる報道の功罪」「天文翻訳ネットワークの国際的な取り組み」「TMT望遠鏡建設のための諸問題」など興味深い発表が続いた。この日は「アンカンファレンス」という時間も設けられた。参加者からテーマを自由に提案してもらって、その中から人気のあったテーマについてフリーディスカッションを行なう。選ばれたテーマは「天文遺産」「IAU100年」「ウィキペディア」「SKAとVLBIネットワーク」の4つ。わたしはというと、「天文遺産」のディスカッションに参加した。

そして、いよいよ閉会式。たいてい最終日というのは、人が減るもの。ところが、朝から、会場には人がいっぱい。皆さん、元気元気。実行委員長のチャン・シリュンさんらが今回のCAPの総括を行う。特に、SNSで

も盛り上がったことに触れ、例えばtwitterでは、ハッシュタグ「#CAP2018」がトレンドの上位に。なんと、福岡1位、オランダ1位、イギリス9位にランクインした。最後に、LOC全員がステージ上に呼ばれ、参加者全員から拍手喝采、スタンディングオベーションで、5日にわたるCAP2018は幕を閉じた（図5）。もう感動の一瞬でした。あの長く続いた拍手は一生絶対に忘れない。



図5 閉会式

参加者からのスタンディングオベーション。

2.4 イベント目白押し

さて、会期中に行われたイベントを、ここで一気にまとめて紹介。まず、初日夜に、大濠公園で行われたウェルカムイベント。メインは大濠公園そばの能楽堂での能楽体験。このとき、バス、地下鉄、徒歩の移動手段を会場でアナウンスしたところ、天候がいいこともあり、なんと多くの人が徒歩を選択。おかげで、チャーターしたバスはがらがら。能楽堂も人がいっぱい、日本伝統の芸能を楽しんだ模様。観望会は地元の方の協力で、能楽堂前に望遠鏡がいくつも出ていて、通りかかる人に月を見せていました。ウェルカムドリンクは、スペースの都合で前半と後半に分ける。それでも、せまい会場に150人近い人がぎっしり。会場では、「古事記と宇宙」というDVDを流して、京都大学の柴田一成さんが解説を行った。

2日目の昼休みには、お茶会が行われた。ただ、わたしは外からガラス越しに様子を眺めていただけ。でも、日本の文化を体感する機会になったと思う。3日目の夜は、ホテルニューオータニでパンケット。こちらも大いに盛り上がった。地元の高校生や大学生が三味線や和太鼓を披露。さらに！ここで、あのブラック星博士が登場。寒いだじやれクイズを披露してくれた。博多ラーメンや、もつ煮込みなど地元のフードを交えながら、あちらこちらで交流の場が広がっていた。

エナジャイザー（Energizer）についてもここで触れよう。エナジャイザーは各日の最初に行っているウォーミングアップタイム。司会者の指示に従って、体を動かしたり、あちこち移動したり、グループになって集まったり。ある日は、事前に配布した同じ絵柄のカードの持ち主で集まるというもの。この絵柄がなんと日本のアニメ。例えば「ポニョ」。いつの間にこんなネタしこんだのやら。しかも、企画したのは外国人。でも、朝から大変盛り上がっていた（図6）。



図6 エナジャイザーの様子

このグループのカードは「ポニョ」？

CAP終了翌日は、エクスカーション。福岡市内散策コースと太宰府・国立博物館コースの2コース。わたしは後者に同行。太宰府では、外国人参加者から、お守りとか絵馬とか

石碑に書かれている文字について、「これはなんだ。どういう意味だ。」と何度も聞かれた。個人的には国立博物館に大満足。好天に恵まれ、また桜もいい感じで咲いていたので、参加者の皆さんはとても楽しんだ模様。

3. LOCとして見たCAP

わたしはCAP開始前日の23日の午前11時ごろに会場入りして、会場の設営準備。他のLOCたちも、22日から現地入りして、朝からカンファレンスセットを作っていた。LOCは東京から来たメンバーだけではなく、福岡市科学館のスタッフや地元のアルバイト学生たち、いわゆるチーム福岡の皆さんも大勢活躍した。

会議中はなりゆきで、メイン会場の入り口にいたので、入り口付近でたまっていた参加者たちを「あの辺の席が空いてるから」とせっせと誘導など。あと、突発的にアナウンスを頼まれ、初日のウェルカムイベントの誘導のために、セッションの合間にアナウンス用のパワーポイントを用意したり。

一番大きな仕事だったのが会場のヘルパー。発表者のサポートである。発表ファイルを集めてパソコンにコピーしたり、発表のタイムキーピングをしたり。さらに、「音声が出ない」とか「動画が動かない」など続出するトラブルに対応。わたしに限らず、ヘルパーを担当したLOCはみな大忙し。でも、発表者と直接関わる分、わたし的には楽しかった。

受付やインフォメーションも、参加者からいろんな問合せや質問や要望が次々とやってきて大変だったらしい。

過去のCAPでは、2013年のポーランド・ワルシャワ、2016年のコロンビア・メデジンも科学館が会場だった。ただ、会場は一般の展示施設からはやや離れていた。ところが、今回はサイエンスホールが6階、分科会会場が4階ということもあり、参加者は科学館の

来場者を横目にしながら、4階と6階の会場を行ったり来たり。おかげで、来場者が科学館を楽しんでいる様子にいつも触れられたのではないかと思う。ミュージアムショップでいろんなグッズを物色する姿もよく見かけた。

4.まとめにかえて

以上、CAP2018は大盛況のうちに無事に終わることができた。大成功だったと言つていいだろう。日本の天文教育普及のアクティビティーや存在感を見せられたのではないだろうか。

今回「なんでこんなに参加者が？」という声がいろんなところで聞かれた。「400人以上集まる国際会議はなかなかないよ。」「53か国からの参加というのもすごい！」という声も。いろんな要素はあると思う。日本という場所、3月という時期。とくに日程の中に土日が入ったことで、国内で参加しやすい人も多かったのだろう。海外の参加者についても、いつもなら、一つの国から一人か二人参加するところ、大勢で参加する国も多かった。東南アジアからの参加が多かったのも、日本で開催したことが要素として大きいと思う。

以前、拙稿で[3]、CAPに参加する意義について、「世界の天文教育普及の動向がわかる」「参加者とのコミュニケーション」「自分たちの活動をアピールする」をあげた。参加者の皆さんは、さすが広報普及に携わる人々の集まりだけあって、どなたも積極的に発言。コーヒーブレイクの会場でもちょっとした問い合わせにすぐ反応が返ってくる。多様な見方・考え方があることの理解も深いように思えた。その結果、以上の意義を感じることができたのではないかと思う。

会議後、自分のネームホルダーやぼろぼろになったプログラムブックを開くと、5日間のCAPの感動と興奮が蘇ってくる。過去に幾度もCAPに参加して、もっとこの会議に

日本人に参加してほしい。いつか日本で開催できたらと願い、ついに実現した。そして、LOCの一人としてこの会議の運営に関われたことを本当に誇りに思う。

次回の開催は2020年春。開催地がどこになるかはまだ先の話しだが、どこになんでも、ぜひ参加を検討してほしい。

冒頭でも触れたが、以上のレポートは、CAP2018のごくごく一部に過ぎない。なので、CAP2018に参加された皆さん、ぜひ感想を「天文教育」に投稿して、CAP2018で出したことを分かち合ってほしい。なお、「天文教育」の次号では、CAP2018の特集をする予定なので、乞うご期待。

文 献

- [1] 矢治健太郎, 2017, 「Communicating Astronomy with the Public 2016 参加報告」, 29:1, p93-98
- [2] <http://tmt.nao.ac.jp/blog/922>
- [3] 矢治健太郎, 2017, 「世界天文コミュニケーション会議 2018 in 福岡 に参加しよう」, 29:4, p64-69



矢治健太郎（左）、
参加者の一人、ステファノ・サンドレリ氏（右）
とともに